ナースシューズにおける問題点

門司労災病院整形外科

横内 雅博・稗田 寛

高木 久雄・後藤 博史

金崎 克也・田中 邦彦

浦門 宏史

久留米大学整形外科

後藤 武史

Problems Associated with Nursing Shoes

by

Masahiro Yokouchi, Hiroshi Hieda, Hisao Takaki,
Hiroshi Goto, Katsuya Kanasaki, Kunihiro Tanaka
and Hiroshi Urakado

Department of Orthopaedic Surgery,
Moji Rosai Hospital

Takeshi Goto

Department of Orthopaedic Surgery,
Kurume University, Fukuoka Japan

Foot injuries associated with use of nursing shoes are current topics. We studied this problem to investigate the incidence of, and actual conditions encountered. We used a questionnaire to evaluate foot complaints nurses. 130 (92.4%) nurses answered that they had some problems. A large percentage of problems were local pain of the forefoot (52.7%). Due to the development of some problem, only 11 (7.6%) of nurses were satisfied with their shoes.

We found that nursing shoes have many problems but are not always caused by the shoe itself. The choice and size of shoe also indicated nurses's lack of understanding to nursing shoes. We believe that this lack of understanding is a cause of this problem.

To decrease foot injuries caused by nursing shoes, it is equally important both to improve shoes and to educate the nurses to the best choice of shoe.

Key words : Nurse (看護婦), Foot complaint (足部愁訴), Questionnaire (アンケート)

はじめに

対象及び方法

私達は毎日使用しているにもかかわらず、意外と靴に関心がない。最近ナースシューズ（以下、N.Sと略す。）に対する足部の障害が注目されてきている。今回我々はN.Sに対する足部障害の有無、程度を知る目的で調査を行ったので報告する。

当院に勤務している看護婦157名を対象とし、N.Sに対する満足度、愁訴の内容、足部症状の有無など11項目について無記名アンケートによる調査を行った（表1）。

表1 調査項目

使用している院内靴の種類
選択理由, サイズの決定方法
年間使用足数
満足度
愁訴の内容
足部症状の有無
疼痛部位 (足部)
足部以外の症状
治療の必要性
院外使用靴との比較
看護婦からの要望

結 果

144名(91.7%)の回答が得られた。年齢は19歳～55歳, 平均30.7歳であり勤務年数は0.5年～30年, 平均8.5年であった。当院支給のN.Sは図1に示す2種類で, 43.7%がtypeA, 44.3%がtypeBのシューズを使用, 12.0%は自分で購入した靴を使用していた。

1. 選択理由: 現在の靴を使用している理由は「病院支給だから」というものが81.2%と最も多く, 「通気性が良い」(12.5%), 「院内業務に適している」(9.0%), などの積極的理由は少なかった。年間使用数は2足～4足で87.6%を占めていた。

2. 満足度: 「是非変更したい」が18.8%, 「出来れば変更したい」が30.0%で, なんらかの障害によりN.Sを変更したいと感じている者は48.8%に及んだ。更に, 変更の必要性を感じないまでも, 「何らかの問題を感じている」(41.9%)も不満足と考ええると満足度は7.6%と非常に低いものであった。

3. 問題点: 問題点の内容としては「局所の疼痛」が52.7%と最も多く特に勤務中, 勤務後に症状を自覚する者が多かった。次いで「通気性が悪い」(34.2%), 「汚物, 血液等による足趾の汚染」(33.3%), 「走りにくく活動性が悪い」(27.0%)などであった(表2)。

4. 疼痛部位: 疼痛を訴えた76人のうち, その部位に関しては「第5趾外側」(26.9%), 「第1趾内側」(16.6%), 「第1趾内側の底側」(11.1%), 「第5趾外側の底側」(7.6%), 「足底腱膜の付着部」(7.6%)等であった。しかし, 疼痛の程度は比較的軽く, 治療を

図1 当院支給のナースシューズ

Type A	Type A…43.7%, Type B…44.3% で, 残りの
Type B	12% は自分で購入した靴を使用していた。

表2 問題点 (複数回答)

部分的な圧迫, 疼痛	52.7%
通気性が悪い	34.2%
汚物, 血液等による汚染	33.3%
走りにくく活動性が悪い	27.0%
耐久性に問題 (破損しやすい)	20.8%
捻挫, 打撲しやすい	16.6%
着脱が困難	15.9%
デザインが気に入らない	6.9%
サイズが合わない	6.2%

要すると感じている者は, 外反母趾による1名のみであった。

5. 院外靴との比較: 次に, 日常生活で使用している履物との比較を見てみると日常生活で使用している履物の方が良いと答えた者が35.3%であったのに対し, N.Sのほうが良いと答えた者は5.3%であった。しかし「履物によって異なり一概にいけない。」というものが53.8%を占め, 更に日常生活において使用している履物についても, 問題がないと感じている者は40.2%にすぎなかった。一方, 34.7%は自分の足にフィットする靴がなかなかみつからないと答えており, 履物の選択そのものが難しいものであること, また市販の靴に改良の余地が多いことを示唆していた。

6. サイズの選択: 看護婦自身のN.Sに対する関心

が低い為か、N.S.を選択する前に試し履きをしなかった者が83.1%を占めていた。その結果適正サイズのシューズを履いている者は72.6%にすぎず、大きかったもの(16.9%)、小さかったもの(10.3%)であった。

7. 看護婦の要望：看護婦自身のN.S.に対する要望としては以下の点が挙げられた。

「材質」：足の形に対して柔軟性がなく圧迫が強いと言う意見が多かった。また、特に足底部にもっと弾力性が欲しいと言う意見も多く見られた。

「サイズ」：サイズに関しては横幅のサイズに選択の余地がない事に対する不満が多く見られた。ここに選択の幅を持たせるだけでも看護婦の愁訴をかなり軽減できるのではないと思われる。

「形状」：足部全体を覆って尚、通気性が良く足趾が汚染されないものが強く望まれている。

考 察

N.S.と足部障害に関しては、石崎¹⁾、岡本³⁾、松崎²⁾等による足部障害の実態、シューズの改良点などについての詳細な報告がある。しかし今回の調査からは靴自体の材質、サイズ、形状に関してまだまだ改良の余地があり、改良することによって足部愁訴をかなり軽減させる事ができると思われる。又、諸家の報告と共通する点も多かったが、相違点も認められた為、併せて考察する。

疼痛部位に関しては岡本³⁾、松崎²⁾らの報告と同様に第1趾、第5趾に多く62.2%を占めたがMP中央底部には7.6%と少なかった。この結果を考えると、アーチサポートを用いることによって開張足を予防し同時に疼痛をかなり予防する事ができるのではないと思われる。更に看護婦の要望を踏まえて我々なりに、より理想的なN.S.を考えてみた。材質としてはビニール性よりもっと柔軟性に富む革の素材を使用し、特に足底部に弾力性をもたせる。足底部にはアーチサポートを付けて開張足を予防し前足部の内、外側の疼痛を

予防する。また、サイズについてはウイズを3Eのみならずもっと選択の幅を広げ自分の足にあったものを選ぶようにする。形状は足趾全体を覆って汚染されない様なスポーツシューズタイプで脱着しやすいようにマジックベルトタイプのものを用いる。勿論、コストの問題もありこれら全てを満たすことは無理であろうがこれらの事を考慮する必要はあるのではないかと思われる。

次に看護婦自身の意識の問題であるが、石塚¹⁾が指摘している様に、欧米に比べ日本では軽くて動きやすい靴を望む傾向が強く、安全性、足部の愛護性についての認識が甘いといわれている。今回の我々の調査では看護婦の不満、要望等をみても比較的その認識は強くなってきたと思われる。しかし、選択理由、試し履きの有無などから推察されるように、使用者側の靴に対する認識不足も依然として顕著にみられ、それがこの足部愁訴の多さの要因を担っていると思われ、靴選択の為の知識の普及もまだまだ必要と思われた。

結 語

①当院に勤務している看護婦157名を対象としNurse-shoesに対する足部障害の有無についてアンケートを行った。

②満足度は7.6%と低く、問題点の内容としては「局所の疼痛」が最も多く52.7%にみられた。

③使用者側の問題点として、Nurse-shoesに対する認識不足、靴一般に対する知識不足等が挙げられた。

参 考 文 献

- 1) 石塚忠雄：看護婦の足部愁訴と履物。関節外科，8：27-34，1989.
- 2) 松崎昭夫，古賀崇正，城戸正喜：当院における看護婦支給靴の問題点と足の障害について。靴の医学，5：162-166，1991.
- 3) 岡本 晃他：ナースシューズの問題点。靴の医学，4：129-131，1990.